

主 誰糸春雨

常磐津 全詞章

常磐津

資料目次の別記「白糸主水」

作詞者・作曲者・初演年不詳

白糸の往昔なつかしまなかに、染てしんくの八重結、互ひに纏れ今更に、解く甲斐もなき物思ひ、あゝ何と障子さへ、明る心のしめやかに、立廻したる屏風の陰、何気なく床の内、面恥氣に側へ寄りモシお客さん申訳は御座りませぬ、私のやうな不束な者の所へ初会にあがらしやんして、嘸お腹も立ませうが、酒癖の悪い客さん故、やうやう寐かして参りました、必ず悪う思召さぬよう、そうしてマアお頭巾を召したなり、お羽織も其儘、ドレお寐かせ申しませう

何の遠慮も馴々しう、紐を解く解く頭巾と共に、脱すうちにも互の顔ヤアあなたは確主水様のハイ女房おやすで御座りますす

エエ

サ、ゝゝ、嘸吃驚で御座んせう

あられもない此様な、姿形を男と見せ

客と偽り上りは

夫の恥と二つには、お前の心を察しやり、定めし朋輩衆へ外間にもならうかと

彼方此方を思遣り、逢に來たのもこなさんに、怒みつらみを言うかと思はんせうが真実に

さらさらそうした訳ではなく、頼みたい事有故と

打つけられて白糸は、消も入たき風情なり

勿体ない其のお言葉、何の御用か知ね共、お心一杯有つて下さりませ、シタが言訳では御座んせぬが、一通り聞て下さりませ、吉原に居る頃は、未だ振袖の訳知ず派手な一座の其中で、つい岡惚の浮氣から、人の客衆に忍び合、末はどうした主水さん

捌んだ縁の橋本へ、住替に出る夫迄は、妻子あるとは露知す

深く鳴子の野暮らしい、腕に二世と堀の内、苦界の中の楽ししも

今は軋れて逢事も、たま玉川の流れの身、堪忍してと許りにて、あとは涙に声うるむ

サア其勤の中にも真実を尽して、呼んで下さるお前の心底、風の便りに聞度毎、喜びこそすれ恨んだ事は御座んせぬ、其誠あるお前故、打明て頼みといふは他でもない去年の冬より病氣にて、勤も引て一夜さも、内、寐ぬ事お頭へ、誰言となく悪様に、申上げたる故にこそ、主水が身の上を密々に、お調べあるとお仲間より、私へ沙汰して呉た故、夫に言へど上の空、押返して言ふにも、片時家へ帰らねば

取付局も溜漕ぐ、たゞの事に此里へ、來ても客には表向き、逢れぬ身ぢやと聞た故どうか首尾して金調へ、肩身を広うした上で、お前に逢て此事を、言て貰うと思へ共、今に都合も出来ぬ故是非なく是非なくも恥を捨て、頼みと言は是一つ

又二つにはお應とて、今年七つの娘もあれば、養子貰ふて跡に立て、主の願ひの町住居、お前に添せ行末は

便りない身の私故、真実心の姉妹と互ひに心おく底も、話し合ふのが楽しみと、打明したる夫思ひ、武家には粋な事ぞかし

何から何まで事を分ての御親切、まだいろいろ話したい事も御座んすが、夜も更たればお寒からう、私の着替を失礼ながら

ア、イ、エ夫には及びませぬ、殊に人が疑念たつる程に、私は矢張り男の形で

成程此御羽織を召ますも

人目厭ふてお前の客

積る話の数々を

同じ衾で悠然と

必ずお風邪召ぬやう

そんならどうでも白糸どの

おやすさま

虚外で御座んす

ドレお著せ申しませう

有合羽織打着て、心解ても何処やらに、疵持足のよしあしを、義理の柵木屏風の内に思ひや籠るらん

実と誠が行合の、椅子に足も引過ぎの、濡によるてふ浴衣、著つ、なれにし廊下口

ア、ようようの思ひで湯へ這入り、心持もよくなつたが、兎角ならぬがこの二階、軋れて上れぬ今の身の上、尚上りたいと言も因果な事、夫はさうと今宵お糸が所へ上つた客は外の女郎に聞ても頭巾を

冠つて顔を見せぬが、此頃お糸が素振と言ひ、おのれ其分で済うと思ふか

氣も紫色の胴拔を、あた腹立に手早に著なし、急立つ胸を押鎮め

と身を潜め、間毎毎の灯火も、いとししんと鉄棒の、鈴虫引し後や先

手鐺提ようと口では言ど、実は棄たや玉の興

ぞめくいなせの短冠り、諷う声さへ風の伝手、隣座敷の三味線は

何処の間夫めと忍び胸

ソリヤこそ俺が推量の通り、二人めそめそ泣て居るが、あの塩梅では此頃の事ぢやない、とうから色になつて居たとみえる、斯様事とも知ずして、可愛想に女房の意見も上の空、おやす堪忍して呉れ呉れやい

他処で解く帯知ずして、くける糸より細き縁

ア、モウ今日といふ今日思当つたは、此様な態になるも、みんなあの腐れ女郎に誑された許りエ、口惜いはい

つい切やすくほくろびて

俺が心も知ずして、面白さうに彈おるは、何は兎もあれ愛へ引出しつたづたに、イヤイヤ大小は愛に無し、チエ、どうして呉う

胸に握かね隔ての障子、辟くる許りに押明て

コレお糸一寸来い、イヤサわれには言事がある

無理に引出し髻髪、とらんとするを隔つるおやす、さは知ずして急立つ主水

申し御免なされ、私はあの女に一寸と話が御座りまして参りました、手間はとりませぬ一寸の間、お貸なされて下さりませ

引捕へんと立寄を、やらじと支ゆる女房が、頭巾を脱げ

ヤアわりや女房おやす

旦那様主水殿、チエ、お前様はなア

私が言はば憎氣らしう、思召も御座んせうと、白糸殿を頼み意見し下さされと、頼みに來たも御家が大事、又二つには娘のお徳、お前様が翌が日お暇となるときは

何を生計に暮さうぞ、弁へのない子心にも、私が顔の瘦せたのを見て他処ながら父様へ、御意見申しおつとめと、ませたとりなし可愛さは

もし私許りの子ぢやないに

親らしい事もなく無得心は何故ぞ、いかなる天魔が魘りしぞ、夫に付ても白糸殿

斯した節の身の上で、驚き入た心の機、夫に引替お前の行跡、緋鹿子の扱帯は何事ぞ、イ、エなア、此お髪の様、足が鎌倉御直参の風俗で御座んすかこれ

十九や廿ぢやあるまいし、憎ないお心やと、真実心の強意見、白糸涙押し拭ひ

此年月御新遣様の御苦労を、余処に見なして聞入ず、二言めには今の様に、訳も聞ずに打ち打擲、愛に御座んしがあなたなりやこそよけれ、他所の武士衆なら座敷へ這入る不法者と、咎められたら

何としやんす、エ、さうした邪慥なお前でも

軋れて後は身を疾う、一目恐ぶが味氣なく、ありとあらゆる嘘言て

客に無心も誰故ぞ、みんなお前に入揚て、部屋著共に身を投掛け、身悶すること道理なり

おやすは懸て金子の包、取出して前に置き

此お金にて何角諸払ひ、肩身を広う居らしやんせ

あやまつたあやまつたお糸其方の親切おやすが心配、今といふ今骨身に染みて何といふ言葉もない、今迄と違ふて其方衆が相談づくで、俺が身体を思ふて呉るもの、何悪く思ふものか、了簡してくれ二人の